今月の川柳

どくだみは、その匂いから嫌われることも多いが、よく見ると、あの白十字は、可愛いものである。

昔から知られた民間薬草で、十以上の力があるので、別名、十薬とも言われる。白十字は、花でなく、葉が変化したものだそうだ。

八女川柳会　安達　昇

老々介護　№10　終いの住みかはどこに…

（少し間があきましたが№.９からの続きです）９５歳になって徐々に体力が衰えてきた母……。「長生きはしたが友だちいなくなり」（シルバー川柳）仲の良かった近くの親しい人も次次に亡くなられ、兄弟姉妹も自分のことで精いっぱいとなり一人でぼんやり過ごす時間が多くなりました。そんな母に子ども（と言っても４人の総年齢359歳ですが）のうち娘２人が「介護付有料老人施設」への入居をすすめるために母の居室へいきました。

ほどなく母を伴って戻ってきました。

百聞は一見に如かず。母を連れて施設を見学に行こうということになりました。息子二人は手分けして、近隣の施設に電話で見学の交渉です。結局三つの施設を見せてもらうことになりました。食堂、浴室、居室、娯楽室、機能訓練室等どこもきれいで充実しています。母も全く拒絶ではないようです。多少不便な思いをしても長く住みなれた家がいいか、終の住みかになるかも知れない環境のいい暮らしをとるか決断を迫られます。決め手としては、家から近い。多くの同世代の人がいる。介護スタッフがやさしそう。入居者に小学校時代の人がいるなど色んな要素があります。しかし口にしませんが母の頭の中には家族にあまり迷惑をかけたくないという思いが一番強いのかもしれません。「親子は一世、夫婦は二世」ふと脳裏をよぎりました。たかお

街かど　gallery

八女市吉田
城後　由嬉子

若い頃お友達のお母さんが久留米の老人大学院に通っておられた様子がステキで、私もその時期が来たら学びたいと思っていました。まず不得意の絵に挑戦しようと水墨画に入会しました。中島先生の情熱溢れる御指導や、一筆で表現される濃淡の美しさに感動し、やってみたいと興味を覚えました。やればやる程難しく、今だに手探りの状態ですが、苦しさ、楽しさを味わい感じながら、水墨画に出会えた事はほんとうに良かったと痛感しています。グループの学習も楽しく、皆さんの進歩に目を見張り、背中を押されながら…継続は力なり、成せば成るの精神でこれからも精進出来ればと願っています。

矢部川源流・杣の里の四季　㉜

サツマイナモリ（薩摩稲森）［アカネ科］

矢部村では丁度、日向神ダムの千本桜が咲き始める頃、杉山の林床にサツマイナモリが咲いている。この花は多年草で谷間の岩場など水分の多い場所で見ることが多い。

名前の由来は、三重県の稲森山で発見されたイナモリソウによく似た花で薩摩で最初にみつけられたということらしい。花の内側が毛で覆われていてふっくらとした柔らかい感じのかわいい花である。

（黒木町）
松尾　重根

クラッシー文芸

■黒木町 くすの実句会

（二月）

悦びも哀しみも独り春寒し　吉泉　守峰
村の名は残る峠や小雪舞ふ　青木　早弓
雪を呼ぶ嵐の音に寝もやらず　野崎万智子
オンドルに母語らざる日々のあり　寺田　睦子
松明の明り頼りに初若布　松尾アサ子
綻びてまた縮むごと梅の花　鍋島　翔山

（三月）

寒風は地球を掠ふ星の息　吉泉　守峰
雛飾る商家の出窓畳敷き　青木　早弓
種芋の待ちわびるごと芽を伸ばす　鍋島　翔山
雪積もる被災地白き無人島　東野　蓉子
煙り立つ松の薦焼く雨水かな　松尾アサ子
吊り革に揺れて目刺しのごとき客　寺田　睦子
啓蟄にまだ間のありしハウス内　野崎万智子

■上陽町 陽泉俳句会

（二月）

温もりの生れにし処寒椿　城後　正子
銀盤の四回転やソチの華　梅野トラノ
褞袍着て仮設の午後の鎮魂歌　古賀シツカ
昭和の香残す港の春時雨　大坪　清香
竹林のまだ静かなり春隣り　大坪　延子
冬帽子目深に被り畑周り　荒川ミヤ子
ちょこなんと庭石の裾蕗の薹　柴田　啓一
立春やスカーフ少し派手にする　倉ノ下和代

（三月）

病む友に禁句も避けて春たより　城後　正子
寒林の樗となりて鳥呼ばず　吉泉　守峰
揺るる尾のほのかに見えて春の鯉　大坪　延子
蜘蛛の囲に枯葉一枚はためけり　中村　境子
虐待の子の多き世や春霙　荒川ミヤ子
紅梅の香りに一と間あけ放つ　柴田　啓一
目の走るところどころに椿かな　倉ノ下和代
仙人も食せぬものによなぐもり　大坪　清香

■立花町 立花俳句会

（三月）

助辞ひとつ推して敲いて春一と日　吉泉　守峰
花冷や日々世に疎くなりにけり　中尾カヲル
茶一服春の条幅書き終へて　西島志乃芙
咲き誇る菜花を避けて畦の道　橋本ミユキ
鳥曇り川面に映す廃校舎　中村テルヨ
春場所や髷なき筆頭奮戦す　樋口　力
カルストに赤き線伸ぶ野焼かな　原　宣子
茶畑に耳欹つる鶯の声　末継ミヨ子

■ひろかわ俳句会

（四月）

交番に猫が留す居の長閑けさや　山下　次男
一陣の風をまともに花吹雪　御厨とみ子
春昼やひとりの客の路線バス　水本　艶子
麗らかや波紋を写す水の底　水本　辰次
耕して土の匂ひも長閑かなり　松延　朝美
長閑さやうつらうつらの媼かな　中村　良郎
のどかさや子亀並びて甲羅干し　田川　義巳
急斜面手づかぬままよ竹の秋　酒井　司

■八女睦句会

（三月）

百千鳥不協和音の鴉かな　堤　呼秋
風船の逃げ行く空へ泣く子かな　松尾　貞義
夕支度ゆとりの出来し日永かな　山口　弘子
法螺の音に法の山々芽吹きけり　大坪　栄子
片付けもまだまだならず春炬燵　牛島佐智子
辛ふじて遠山見する霞かな　穴見ミキヱ
悪童は何をして来し春の泥　伊藤　幸子
一斉に華やぐ球場ゴム風船　城戸　和子

■立花町短歌会（四月）

うつむきて咲きたる小百合の花の露零れ落ちては土に消えゆく　野中　裕政
雨上がり桜の花びら地に落ちて花の命の短さ思う　田中たつじ
筍は日毎に量を増してくる楽しみもありまだ現役と　松尾ミサキ
復興に力添えする歌声はテレビで流れる「花は咲く」よと　鶴　隆次郎
満開の桜で遊ぶ小鳥たち枝を飛ぶたび花びら舞い散る　中村サチ子
青空に伸びて辛夷の花盛り植えたる妻は見ることもなく　井上　精
庭先の椿の花はポトポトと散りて真っ赤な絨毯を敷く　中島　睦美
庭先に木蓮咲いてやっと春遅霜受けて一夜に変わる　橋本　泰州